

関根達人著

『石に刻まれた江戸時代―無縁・遊女・北前船―』

福井 敏隆

このたび、弘前大学人文社会科学部教授の関根達人教授が、吉川弘文館の歴史文化ライブラリーNo.498として右書を上梓された。前著『墓石が語る江戸時代 大名・庶民の墓事情』（以下、前著と略記する）に続き、長年にわたって調査研究をしてきた墓石研究を一步進めて、身近にある石造物に関する調査研究の成果をまとめたものが本書である。

評者は、考古学については門外漢であり、本書の書評と紹介を担当するのは必ずしも適任とは思われないが、国史研究会の役員を一緒にしていることもあり、御依頼があったので、お受けした次第である。先ず内容の紹介から始めて、若干のコメントを述べて何とか責任を果たしたいと思う。本書の大目次を次に列挙する。

「紙に書かれなかった歴史」を読み解く―プロローグ

身近な石造物……………以下1とする

石に刻まれた飢饉の記憶……………以下2とする

石に刻まれた地震・津波・噴火・水害の記憶……………以下3とする

石に刻まれた事故と疫病の記憶……………以下4とする

遊女と刑死者の供養塔……………以下5とする

北前船と石造物……………以下6とする

石のモニユメントが繋ぐ過去と現在―エピローグ

プロローグでは、近世史研究では古文書（史料）が中心で、石造物が注目される事はほとんどなかったと説く。その理由は、①石造物の情報が古文書に比べて圧倒的に少ない事。②我が国の石造物研究は「石仏」を対象とし、それ以外は研究対象とならなかった事。③石造物の調査は古文書に比べ「労多くして益少なし」と見なされる傾向にあったためであるという。しかし一九九五年の阪神・淡路大震災以降は災害史研究が盛んになり、二〇一一年の東日本大震災以降は津波碑等の災害碑に関心が寄せられる様になった。本書では、墓石以外の石造物の多様性を紹介し、ついで飢饉、災害、事故・疫病などの犠牲者や、前著から漏れた遊女・刑死者といった墓石を残せなかった人々にも光をあてている。最後に、日本海沿岸の湊町や住吉大社・金刀比羅宮など神社に奉納された石造物を取り上げ、人や物の動きを描くと共に、石工の姿も追っている。それでは具体的に大目次に従い内容を紹介していくが、紙幅の都合もあり、本県関係のものを主に取り上げた事をあらかじめお断りしておく。

1は、①石は頑丈な「記録媒体」、②多様な江戸時代の石造物の2項からなる。②では、迷子しるべ石・なかたち石、顕彰碑・記念碑、浅草観音戒殺石、釈迦嶽等身碑、三力士追慕碑が紹介されている。このうち二二頁の表1「江戸時代に建てられた主な石造物」は著者による詳細な分類である。ただ、仏像等のそのものの具体例に十三仏があるので、よく対比される六地藏（菩薩に分類されたと判断したが）をいれても良かったのではないかと思つた。三力士追慕碑は五所川原市錦町の久須志神社境内にある、弘前藩お抱え力士であった伊勢海利助（大関・第五代柏戸）のものである。弟弟子の鳥井崎与助と麓川藤八の両名の名前が太

刀持ちと露払いの様に刻まれている。嘉永元年（一八四八）の造立という。出雲出身の釈迦嶽等身碑が、相撲に関連した石造物が多く存在する東京深川の富岡八幡宮（江東区）に造立されているのに対し、郷土出身のスーパー力士（優勝十六回）の顕彰碑でもあるこの碑が、地元にひっそり建っているのは対照的である。

2は、①飢饉供養塔とは、②元禄・宝暦・天明・天保の飢饉と東日本、③享保の飢饉と西日本の3項からなる。①では天明の飢饉供養塔の本県における悉皆調査が、弘前大学に赴任した著者の最初の研究調査であり、そこから石造物調査研究に邁進して行った様子が書かれていて興味深い。本県にとっては②の記述は避けて通れない。三九頁に湊迎寺（五所川市十三）の過去帳に現れた死亡変動をグラフにした図7が載っており、元禄・寛延・宝暦・天明・天保の飢饉時の死亡者が突出している様子が見て取れる。特に天明・天保の飢饉の被害は甚大で、弘前藩・盛岡藩・戸藩領域では多くの餓死者を出した。そのため、両飢饉の供養塔は数多く造立され、四五頁の図8「青森県・宮城県の天明と天保の飢饉供養塔造立数」ではその推移が見て取れる。青森県の供養碑数が宮城県より多い事を突き止めたのは著者による調査の一大成果である。天明の飢饉の五十回忌の後に、天保の飢饉が始まるのは何とも皮肉な巡り合わせになっている。一方、元禄・宝暦の飢饉供養塔の少なさも気になる。

3は、①南海トラフ巨大地震と津波災害碑、②松前大島噴火と寛保の津波災害碑、③寛保の大洪水と災害碑、④天明の浅間山噴火と災害碑、⑤安政江戸大地震・安政江戸大風災と災害碑の5項からなる。①では二〇一一年の東日本大震災以降は津波碑に注目が集まっているという。国

土交通省、防災技術研究所自然災害室をはじめ、津波碑を紹介するウェブサイトに多い。国土地理院では二〇一九年六月からウェブ地図「地理院地図」で、自然災害に係わる石碑やモニメント（自然災害伝承碑）を公開している。評者からも是非ご覧頂く事を推奨したい。私事になるが、評者も二十代の後半に、弘大に赴任して間もない長谷川成一弘名誉教授の仲介で、東大地震研究所による弘前藩庁日記「国日記」・「江戸日記」から、地震関係記事を抽出する調査（宇佐美龍夫教授が主担）を手伝った。関東大震災クラスの地震が再度起こる可能性があるという事で、「歴史地震」の研究が急がれたためである。古文書からみた地震研究に少しは貢献したのかなと思っている。

当時から南海トラフが巨大地震を起こす震源だとは知られていたが、徳島県美波町にある最古の地震碑「康暦碑」は正平十六年（一三六一）の正平南海地震を記録したものだという。江戸時代では宝永四年（一七〇四）の宝永南海地震関連碑、嘉永七年（一八五四）の安政南海地震関連碑が紹介されている。この項では、三重県尾鷲市馬越墓地まこせにある宝永南海地震の犠牲者を弔うために正徳三年（一七一三）に建てられた三界万霊塔に係わる調査エピソードが大変素敵である。この供養塔の横には石製の「ベンチ」と蓮華の台座があった。調査時に、近所の人から、馬越の墓地では、埋葬の際には「ベンチ」に葬具、蓮華座の上に骨壺を置き、供養塔とそれらの周りを葬列が三回廻る習わしがある事を聞いた。斜め向かいには死者を導く六地藏もおられ、供養塔が建ってから三百年以上たち、津波の供養塔である認識は薄れたが、死者を成仏させてくれる有難い石碑であることは今もこの地の人々の記憶に残っていたとい

う。時々、近所の子供が「ベンチ」に座って遊んでいるそうだが、死者達も許してくれるのに違いないと結んでいる。死者と生者を結ぶ場に立ち会えたのは、「紙に書かれなかった歴史研究」をしておられる著者が、長年調査という功德を行ってきた賜物であると思われる。

②では寛保元年（一七四一）の松前大島の噴火による津波災害碑を紹介している。松前町の供養碑二基、江差町の供養碑二基、八雲町熊石の地蔵尊一基である。江差の日蓮宗法華寺の供養碑は津波被害の約一ヶ月後に造立されたのに対し、八雲町熊石の浄土宗無量寺にある地蔵尊は延享三年（一七四六）造立で五年の開きがあるのは、熊石の被害が大きかったためであろうと推測している。この津波では弘前藩領の西海岸でも三名の死者が出た。供養碑はないが、「国日記」を引用して紹介されている。この津波による被害は蝦夷地では大きく、死者も多かった（「国日記」では住民三七〇人・旅人八〇人と見える）が、和人側の記録のみでアイヌの人々の被害状況が判明しないのは気になる場所であると結んでいる。

③では寛保二年七月末から八月初めに近畿・信越・関東を襲った、江戸時代の最大級の広域大水害について述べている。特に利根川・荒川・多摩川等の大川が軒並み氾濫した関東では甚大な被害が出た。ここでは供養碑より、武蔵国入間郡久下戸村（現埼玉県川越市）の名主奥貫友山おぐんがとった救済行動に焦点が当てられている。奥貫家の屋敷から南東一・三kmにある氷川神社の本殿前に置かれた石灯籠左側面には洪水の水位二尺の文字が刻まれており貴重な歴史資料となっている。但し、この石灯籠は本来神社そばの富士塚の上にあったようで、村は標高九・

五m前後まで水に浸ったらしい。最近の異常気象により線状降水帯もたらす水害が多くなった。五十年に一度とか百年に一度の豪雨という報道を聞くにつけ、新たな被害碑が造立されないことを祈るものである。

4は、①大火を伝える供養碑、②海難事故の犠牲者の供養碑、③橋脚落下事故の犠牲者の供養碑、④疫病と石造物の4項からなる。③では文化四年（一八〇七）に起きた永代橋の橋梁落下で、多数の犠牲者が出た事故の供養塔について述べている。事故後の百ヶ日と五十回忌に建てられた供養塔二基は、深川の黄檗宗おぼく海福寺境内にあったが、同寺が明治四年（一九一〇）に目黒に移転したのに伴い、同じく移転した。この事故の犠牲者数は記録により違いがあるが、四mを超える百ヶ日供養碑に刻まれた溺死者数一二七人は事故後まもなく佐賀町河岸で引き上げられた死者数を示すものとして貴重である。一八二〇三頁の表5に見える溺死者数のうち子供の人数が痛々しい。

④では死亡率の高い疫病の疱瘡（天然痘）・麻疹（はしか）・痢病（赤痢）・箇所痢（コレラ）関係碑を取り上げている。埼玉県川越市の浄土宗安国寺にある安政六年（一八五九）年造立のコレラ供養碑には、現在の埼玉県の東南部一帯（詳細は一九二〇三頁の表6参照のこと）の多くの人々が万人講を結成し、安国寺中興第二五世住僧宏善上人の指導のもと同寺に集まり、仏前に物を供え、名号を唱えて死者を弔った記録が彫られている。現在ではクラスターが発生しかねないと思われるが、何とか乗り切ったのである。昨今の状況を考えると、新型コロナウイルス感染による死亡者の供養碑が造立されないことを強く願いたい。

5は、①遊女供養碑、②刑死者の供養塔からの2項からなる。前者で

は触れられなかった部分である。①では、かつての箱館、千住宿、内藤新宿の遊女供養碑について紹介している。開港地、宿場町としての機能の裏に付随した遊女屋の存在が見て取れる。新宿二丁目にある浄土宗成覚寺には二基の供養碑があるが、同寺は新宿の投げ込み寺と呼ばれたという。新宿二丁目は明治以降も姿を変えつつ現在も歓楽街であり、遊女たちはこの地で成仏できているのか心配だという嘆きが重い。

②の小塚原刑場跡（千住宿の南にあった）の通称「首切り地蔵」は、寛保元年（一七四一）に造立され、資金の提供者は千住宿の厚志者の他、千住からは遠い木場深川や日本橋の商人等であるのが特徴である。この地蔵は刑場跡のシンボルとして紹介されることが多い。著者は寄せ石作りという特殊な製法を紹介し、古川柳に見える「ぬいあげ（縫い上げ）」という語句を、寄せ石作りと、刑場で行われた試し斬り後の遺体を縫い合わせる事に懸けておられる。評者は最初に「首切り」の名称について、この刑場で首斬りを実際に行った山田浅右衛門（首斬り浅右衛門と呼ばれた）に因む事を書いて頂ければ対比ができ良かったのにと考えた。

6は、①日本海津々浦々の石造物、②下北半島の海運関連石造物、③住吉大社と金刀比羅宮の石灯籠の3項からなる。①では二五二―五八頁の表8「北海道・本州日本海沿岸の近世海運関連石造物」が圧巻である。北は北海道から南は山口県まで、著者が調査した一六一ヶ所、三三二基についてのデータは他の追隨を許さない。二二七頁の図69は北海道と本州日本海沿岸に所在する石造物の分布地図である。表8と図69は対応しており、データをもとに研究の深化がさらに進むことだろう。

②は日本三大霊場の恐山をはじめとする下北半島に残る石造物につい

て紹介している。恐山の曹洞宗菩提寺の本堂に向かう参道には弘化三年（一八四六）から嘉永二年（一八四九）に建てられた石灯籠が並ぶ。いずれも北前船によって運ばれてきたものである。このうち四一基に奉納関係者及び運搬船の情報が刻まれている。奉納者は、松前商人が最も多いが、北は蝦夷地の小樽・古平ふるひらから西は讃岐の塩飽しわく・泉州堺に及ぶ。運搬船は箱館の山本氏の手船豊栄丸が最も多いが、讃岐丸亀の橋屋吉五郎の船などが使われ。野辺地の野村治三郎の船も一例認められるという。二二八頁の図70にみえる海運関連石造物造立数の変遷グラフでは、一八四〇年代から造立が増加するが、弘化以降の現存石灯籠はそれを物語っているといえよう。天保十二年（一八四一）改刻の恐山境内絵図（『青森県史 民俗編 資料下北』青森県 平成十九年 六五八頁）には常灯より本堂側に一〇基の石灯籠が見え、天保年間には献灯が行われていたことが分かり、古文書の面からも裏付けられる。

また、恐山参詣道には一町（約一〇九m）ごとに、目印の丁塚石が設置されている。これらにも年紀、奉納者名の刻まれたものが六〇基あり、石灯籠と共に恐山信仰圏の広がり物を語る。下北半島にはこのほかにも海運関係石造物が多く残り、二四三頁の図82で「石工銘のある下北の石造物」が示されている。石工は大坂石工・備後尾道石工・越前福井石工・加賀管沢石工と多岐にわたる。

③では、二四八頁の図83と84で、大阪の住吉大社と香川県の金刀比羅宮に奉納された石灯籠の年代別造立数のグラフが示される。住吉大社の六二四基では一七二〇年代・一七八〇年代・一八六〇年代とほぼ六〇―七〇年間隔で盛期が見られるの対し、金刀比羅宮にある江戸時代に奉納

された三一九基では、一七七〇年代に急増し、同八〇年代にピークを迎

一八〇〇円＋税

(ふくい・としたか 弘前市文化財審議委員長)

えた後、その後は増減を繰り返しつつ幕末に向かって増える傾向があるという。住吉大社の石灯籠に石工銘がみられるのは最大のピーク時の一七二〇年代からで、泉州石工と大坂石工の作が多いという。一方、金刀比羅宮の場合は讃岐琴平石工、讃岐丸亀石工、大坂石工の作品が多いが、当初は大坂石工の作が多く、讃岐石工の作が大坂石工の作を上回るのは一八〇〇年代以降だという。

エピローグでは、石造物は人が自らの行為と思考を石に閉じ込めた「化石」であると定義づけている。東日本大震災以後、悲劇の地を訪れる「ダークツーリズム」に多くの観光客が足を運ぶようになった。本書で述べた飢饉供養塔や津波塔には、犠牲者の供養と子孫への遺戒を兼ねたものが散見され、このような石造物こそ「ダークツーリズム」の格好の素材であると提言して本書は終わっている。

以上、本書の内容を簡単に紹介してきた。本書の根幹をなしているのは著者が足で稼いだ広範で膨大な石造物のデータである。そのデータを豊富な図・表やグラフで示して、読者により分かりやすく示しており、歴史文化ライブラリーの趣旨に適っていると見える。加えて、調査成果を文献史学の研究成果も取り入れて適切な分析も行っており、論証のあり方は多角的で説得力もある。ただ、評者のような老眼鏡を必要とする者にとっては、四六判という判型のため図・表・グラフの数字や文字が小さく、読み取りがきつい部分がある事だけは付記しておきたい。ともあれ、考古学・歴史考古学の研究者にとっては格好の入門書である。

(四六判、二六八頁、吉川弘文館、二〇二〇年四月一日発行、本体価格